

# Barren Groundにおける女性の自立と土地の再生

今井加寿

## I

Ellen Glasgow (1873-1945) は、彼女の小説の手法について述べたエッセイ集、*A Certain Measure* (1938) のなかで、自分の愛するヴァージニア州の南北戦争後の社会史を小説の形にして残そうとしたことを述べている (4)。歴史を政治経済上の「事件の記録」としてとらえるのではなく、その時代に「生きた人々の記録」として残そうとした。即ちヴァージニア州の女性達に光をあて、彼女たちの肉声を聞こうとしたのである。

Glasgowは、また、社会史を描いた自分の作品を自らヴァージニア州歴史小説群、田園小説群、都市小説群に分類している<sup>1</sup>。その中で田園小説群に分類される*Barren Ground* (1925) は、女主人公 Dorinda Oakley がたばこ栽培と戦禍により荒廃した大地を、再び豊かな牧草地へと改良していく物語である。人間によって破壊された自然を再生していく過程を描いており、その過程は主人公が自立し自己実現していく生き方とパラレルな構造をなしていると言える。因習的な結婚によって男性に依存して生きようとした20歳代から、自己のアイデンティティを確立し、自然と対峙していく30、40歳代へ、さらに自然環境と調和して自分が土地に生かされていることに気がつく50歳代へと物語は進む。それはPamela Matthewsによれば、“the evolution of Dorinda Oakley as a character”の過程の描出であり (155)、Blair Rouseによれば、“The drama of her developing personality”である (89)。土地の改良・再生とともに、主人公は昔の貧しい生活の抑圧から解放され、また、同時に「女性としての社会的抑圧」からも解放され自立していく。本論では、Glasgow批評家によって“an epic of the soil”と称される本作品の中で (Thieboux 124)、主人公の人格の発展と土地の再生のパラレルな構造を、Glasgowがどのように提示し、そこにどのような南部女性像を描いているのか、考察を試みる。

## II

*Barren Ground* において、まずGlasgowが提示するのは主人公の生活の場である不毛な土地、Pedlar's Mill である。それはGlasgowが幼少期過ごした夏の家、Jerdone Castle のあった、ヴァージニア州のPiedmont 台地をモデルにしている (Rouse 87)。Pedlar's Millの情景は次のように描写されている。

Bare, starved, desolate, the country closed in about her. The last train of the day had gone by without stopping, and the station of Pedlar's Mill was as lonely as the abandoned fields by the track. From the bleak horizon, where the flatness created an illusion of immensity, the broomsedge was spreading in a smothered fire over the melancholy brown of the landscape<sup>2</sup>.

Glasgowは、“bare”、“starved”、“desolate”、“abandoned”、“bleak”、“flatness”、“melancholy”という語を並べ、Pedlar’s Mill の荒涼としたイメージを提示し、その荒涼さに主人公を対峙させている。ブルームセッジというかやつりぐさの一種が一面に生い茂る荒野からは、何年待っても実りを収穫することはできない。深く根を張ったその植物が生い茂る荒野は、豊かな農園とは対称的な情景を読者に示している。村一番の大工であるMatthew老人がいつも口癖のように、「ブルームセッジは単に野生の生き物じゃねえ。一種の宿命じゃよ。」(4)と語るように、ブルームセッジは超自然的な力を思わせながらカサカサと音をたて、そこに住む全ての人間に漠然とした不安を与えていた。何年も変わらぬその陰鬱な風景は、土壤の貧しさと不毛さという現実を伴ってPedlar’s Millの住民を圧倒していたのである。Dorindaにとって「普遍で永遠だと思われるただひとつのこと、それは土壤の貧しさ」(10)だったのである。ブルームセッジはこの後、作品のいたる所に頻出し、Pedlar’s Millの陰鬱さを読者に繰り返し印象づけている。

この土地の歴史的背景についてGlasgowは第一章の多くを割き、その不毛さの原因を南北戦争と戦後の小作農制度にあると説明している。即ち、小作農民らはタバコなどの換金作物を生産することによって土地を乱暴に使用し、土壤を消耗させ、使い捨ててしまった。その様子は、「小作農たちはハゲタカが死骸に群がるように戦争の廃墟に群がり、たちまち単調な風景を骸骨のようにきれいに食い尽くしてしまった」(4)と描写されている。またGlasgowはDorindaにPedlar’s Millの冬の風景が「過労の農耕馬の顔に浮かぶ表情を思い出させる」(9)と感じさせ、人間に力づくで服従させられ、疲れ果てた馬の姿に貧しい土壤を喩えている。それは即ち、土地を疲弊させ、荒廃させたのは、戦争、小作農制度という人間のもたらした愚かな行為であったことを意味している。

Old Farmに住むOakley一家は、戦前からPedlar’s Millに入植し今日まで残っている、たった3軒のイギリス出身の独立自営農民(yeomen)である。「歴史とフィクションに無視された彼らの社会的地位は、下層上流階級と上層『貧乏白人』の中間の目立たない位置にある」(5)とGlasgowが指摘する彼らは、土地所有者でありながら、かえってその土地に縛られ、「土地貧乏」(“land poor” [6])と呼ばれていた。Dorindaの父Joshuaはヴァージニア山岳地帯からのスコッチ・アイリッシュ系貧乏白人であったが、同じくスコッチ・アイリッシュ系の独立自営農民の娘、Eudoraと結婚してこのOld Farmを耕すことになったのである。千エーカーの土地はそのほとんどを木材にもならない質の悪い松や、ブルームセッジがおおう不毛の土地で、その小さな一角がかろうじて耕され、Oakley一家の命を生きながらえさせていた。

Glasgowはその土地の歴史的背景を詳細に語りながら、Old FarmのOakley家が貧しさに圧倒されながらも自営農民であるというプライドと「不屈の精神」(“fortitude” [5])を持つスコッチ・アイリッシュの一家族であること、そして、父母から受け継いだスコッチ・アイリッシュの血がDorindaの体内の「鉄の血管」(“vein of iron” [89])の中で脈をうち続けていることを強調している。

このような土地の荒廃の描写に並行して、男性に抑圧され、傷つけられた一人の女性の生きざまが描かれる。Dorindaは、ニューヨークから病気の父親の看護のためにPedlar’s Millに帰省している若い医師Jason Greylockに惹かれ、結婚を約束する。そんな時、母との会話の中で、母に女性の恋愛は「あるがままの現実から抜け出そうとしている」感情(89)であることを指摘される。さらに「何事が起ころうともお前の人生を誰にも損なわせないと決心していれば結婚しても大丈夫だ」(89)と言われる。しかし、20歳の若いDorindaは母の語る「誰にも損なわせ

ない自分自身の人生」が一体何であるのかを認識することは出来ない。そしてJasonの「ぼくはこの土地が我慢できないんだ」(93)という言葉に影響を受けて土地に対する嫌悪感を募らせていく。

純真であったDorindaはJasonに従おうとする。目の色と同じ青い服を盗んででも着るように言われた時は、彼の言葉に従おうと、牛を買おうと思って貯めておいた30ドルでブルーのドレスを仕立ててもらふ。しかし、Dorindaの気持ちを踏みにじるようにJasonは、前の年チャールストンで交際のあった裕福な農園の娘、Geneva Ellgoodと結婚してしまう。

Dorindaは家父長的な伝統に従って自分も結婚し、夫に従属していくことを自分の道だと考えていた。しかし自分の将来を託していたJasonに裏切られ、彼女の土地と同じように傷つけられ、見捨てられ、疲れ切ってしまう、いったん自分の生まれ育った土地を捨て、ニューヨークへと旅立つ。ニューヨークを選んだ理由は、ただ彼女が知っている一番遠い都会であったからである。この行為は外面的には自分を結びつけていた土地、そしてスコッチ・アイリッシュの伝統を受け継ぐ貧しいヨーマン農家からの逃避であり、内面的には自己のアイデンティティの喪失・自己逃避を意味している。Dorindaが見捨てた不毛の大地は、人生の希望を失ったDorindaの孤独な生を表出していると言える。

### III

Dorindaはニューヨークに到着後、自動車事故に遭い、生死の境をさまよった後、自分が入院していた医院で働くようになる。ニューヨークでの生活は郷里の土地、家族から離れ、非常に孤独で厳しいものであった。それはまた自分を縛り付けていたすべてのしがらみからの逃避でもあった。彼女は孤独な生活のなかで、さらに深く自己の内面と向かい合うようになる。ニューヨークという都会ではすべてが二項対立的に提示される。即ち、都会対田舎、男対女、富対貧困、学識対無知という風にある。そしてDorindaは、田舎ものの女性であり、貧しく無教養な自分に対峙する全てのものに疎外感を抱く。ニューヨークでJasonとの間に身ごもっていた胎児を流産したDorindaこそが土地と子供を失ったという意味で不毛の象徴であり、他人と信頼関係を築くことができないという点においても人間関係の不毛性の象徴であることをGlasgowは暗示している。Glasgowは、ひとりの見捨てられた女性の貧しさを彼女の故郷の土地の貧しさと重ね合わせているようである。

ニューヨークでの2年間ブルームセッジはDorindaの視野の中にはない。しかし、彼女の心の奥深くでは故郷の土からブルームセッジが芽吹く時を待っていた。やがてDorindaがニューヨークの音楽会で聴いた雄大な調べは、大地にはびこり、さざ波のように音を立てるブルームセッジの風景を喚起させ、彼女を圧倒する。記憶の中のブルームセッジの印象とともに郷里の風景が思い起こされ、その風景は心地よい刺激となり、彼女の存在の奥深くまで到達し、彼女の心の中にある土地への想いを覚醒させる。ブルームセッジの印象は貧困を暗示する初めの負の印象から土地への愛着をDorindaに感じさせる正の印象へとここで転換する。

This was not music, she thought in surprise, but the sound of a storm coming up though the tall pines at Old Farm. She had heard this singing melody a thousand times, on autumn afternoons, in the woods. Then, as it drew nearer, the harmony changed from sound into sensation; and from pure sensation,

rippling in wave after wave like a river, it was merged and lost in her consciousness. . . . Down there, in the deep below the depths of her being, she felt it tearing her vitals. Down there in the buried jungle, where her thoughts had never penetrated, she felt it destroying the hidden roots of her life.

Now it was dying away. Now it was returning. Something that she had thought dead was coming to life again. Something that she had buried out of sight under the earth was pushing upward in anguish. (203-204)

郷里の土地への想いが自分の心の奥深くにまだ死なずに息づいていると感じたDorindaは、Old Farmをこのまま死なせてはならないと思うようになる。彼女の土地への想いは、即ち彼女自身の生きることへの希求となって甦ったのである。音学会の帰り道、同じ医院で働く若い医師Burchから土壌の改良についての勉強を勧められ、夜間学校で勉強を始める。土地について勉強をするうちにDorindaはOld Farmの土地の再生が科学的に可能であると考え、父親の危篤の知らせを機に故郷へ戻る。都会の不毛に喘ぐ生活の中からDorindaは土地の再生のために自分自身も再生しようとする強い思念を悟り得たのであった。

#### IV

Old Farmへ帰郷したDorindaはまず土壌の改良に着手する。生物学的には土壌中の養分を増やすため窒素を固定する植物、アルファルファを移植する。そして輪作によって肥沃な土壌へと変化させる。

また、Glasgowは、Dorindaのジェンダーの転換を描写することによってDorinda自身の変革を読者に示している。すなわち、貧しい農場から兄も弟も出ていった後、娘であるDorindaが家を継ぎ、男のオーバーオールを着て、黒人の使用人を使い、土地の改良、新技術の導入、土地の拡張に努める。肉体的にも「彼女は以前より痩せた。筋肉は強くしなやかになり、肌は焼けて薄い琥珀色になった。鮮やかな口元の曲線はよりきつくなり、魅惑するような女らしさが薄れていった」(265)と描写される。

土地が改良されていくのと平行してDorinda自身の内的な不毛の土壌で変化が起こっていく。つまり彼女の人生経験と科学的知識、そしてスコッチ・アイリッシュの「不屈の精神」が混合され、あたかも化学変化を起こし、肥沃な心の土壌へと再生し、生存のための豊かな精神的環境を生み出していくようである。Dorindaの精神的な再生は彼女の土地に対する思いが深まるに連れて起こり、やがて土地自体が、Dorindaに活力をあたえる生命をもつ存在にまで高められていく様子が次のように描写される。

She knew that the place was more to her than soil to be cultivated; that it was the birthplace and burial ground of hopes, desires, and disappointments. The old feeling that the land thought and felt, that it possessed a secret personal life of its own, brushed her mood as it sped lightly by. (233)

Dorindaの意識の中で、挑戦すべき自然から、次第に土地それ自体が「ひとつの秘密の生命」をもつ存在として彼女とともに生き続けるものへと変化していく。そして生命をもった土地とともに

に生きることが自分自身の存在意義であり、言い換えれば土地が彼女の生命の基盤であると意識するようになる。そこには自然に対峙して必死で戦って行こうとする哀れな農民ではなく、自然を慈しみ、その土に枯れ葉となって朽ちていった祖先の血を自らの血の流れの中に受け継ぎ、大地に確固と両足を踏まえた農民の姿がある。

故郷の土地へ戻ってから10年後、Dorindaは首都ワシントン的高级ホテルへ上質のバターを入荷する酪農業主として成功するである。

## V

自己を抑圧していた土地を、逆に自己の存在のよりどころとして意識するようになった晩年、Dorindaはさらに「共同体及び自然との共生」に目覚めていく。パラレルな構造で進んできた主人公の再生・成長と土地の改良・再生が、ここで融合する。即ち、父の死後、父の耕した土地の一角を見ながら、土地と自己との結びつきを次のように強く感受する。

Kinship with the land was filtering through her blood into her brain; and she knew that his transfigured instinct was blended of pity, memory, and passion. Dimly she felt that only through this fresh emotion could she attain permanent liberation of spirit. (260)

Dorindaは「土地との一体感が、彼女の血液を通して脳へと浸透していった」ことを感じ、自分もその土地と共生していることを認識する。

共同体との共生について、Dorindaの意識が変化する様相は主に次の二つのエピソードによって提示される。

酪農業主となったDorindaは、自分自身が強者になり、支配者になっていたことに気づく。また、酪農家としては大成功するが、裏切られたJasonに対する敵意を持ち続け、いつまでも心の傷を癒すことはできない。以前の貧しさからは解放されたにもかかわらず、そこには相変わらず孤独と緊張と疲労が充満し、何か満たされずにいた。30歳を過ぎ、そろそろ「老い」について考えるようになり、ひとりで老いていく不安を感じたDorindaは、4人の子供を持つ妻をなくしたPedlar's Millの名士Nathan Pedlarの結婚の申し出を受け入れる。Dorindaにとって彼は初め「退屈な男」であり、なんら魅力を感じることもなかった。彼女は彼を愛することはできなかったが、彼の「敬服すべき誠実さと称賛すべき寛大さ」(361)を認め、愛に変わる最良のもの、つまり寛容の心を選び、彼と結婚し、彼の子供たちと暮らすことになる。

ところがその後、Nathanは吹雪の朝、突然の列車事故に遭い、乗客を助けようと燃える列車の中へ飛び込み、英雄的な死を遂げる。このNathanの死が共同体への接近をもたらす。つまり、嵐と雪解けによる洪水で橋が崩壊したにも関わらず、「白人も黒人も、金持ちも貧乏人も」村中の人々が弔問に訪れる様子が次のように描写される。

The bridge had damaged by the storm, and the thawing ice had made the the shallow stream unfordable. Old Mr. Kettledrum, who had given up his practice and become "the mail rider" for the new rural delivery, had been almost swept away when he had tried to cross at the ford. Even Willow Creek was so high

that the log bridge had been torn to pieces by the flood. Yet neither flood nor snow had held the neighbouring farmers at home. White and black, rich and poor, they had turned out to visit the widow of a hero in her affliction. (385)

この事件がきっかけになって、社会的人間関係で不毛であったDorindaが村の人々に受容され、また彼女自身共同体の一員である意識を持つようになる。

共同体との共生をDorindaに意識させるもう一つのエピソードは、Jasonを敵視していた、かつてのかたくなな自己からの解放を物語るものである。子供たちも成長し、家には足の悪い末の息子John AbnerとDorinda、そして家族同然の黒人のメイドFluvannaだけが残った50歳も過ぎた頃、アル中で死に瀕したJasonが劣悪環境の救貧院へ送られることを知る。一度は殺意を持つほどに嫌悪していた彼をDorindaは家に引き取り、介護をし、人間として尊厳のある死を迎えさせる。

Jasonの介護を引き受けたのは、Dorindaが人間として、その土地に共生していく共同体の一員として果たすべき人間の義務を、社会的に自覚したからである。しかし義務だと思って引き受けたDorindaであったが、ポーチで日光浴をする車椅子姿のJasonのいる風景を家庭的なものとして受け入れるようになる。Jasonに「君がここでよくしてくれるのがなぜだかわからない」(439)と言われ、Dorindaは「人は時には互いに思いやらなければいけないのよ」(440)と答える。共同体から切り離され、孤立したこれまでの自己を放棄し、共同体の一員としての自覚を持つようになったのである。

Glasgowは、Dorindaが自然との共生を意識していることを提示するのに、歴史を政治経済的にとらえるのではなく、「歴史を生物学的に解釈する習慣になった」(393)とDorindaに語らせる。つまり、Dorindaにとって歴史上の出来事である戦争は、政治経済上の出来事というよりも、額に汗した作物を無惨に焼き尽くし、一瞬で灰にしてしまう生態系の破壊行為であり、作物と同様に地上の生態系の一部である人間をも破壊する行為である。また、人が生態系を生かしていくのであり、Dorindaは自然との共生の手段としての「輪作」に成功したのである。土の中に生命を感じ、その生命が「輪作」というリズムで響いてくること感じる様子をつぎのように描出されている。「じゃがいも。トウモロコシ。小麦。ササゲ。クロバー。アルファルファ。そしてもう一度戻っていく。アルファルファ。ササゲ。じゃがいも。トウモロコシ。小麦。クロバー。それが彼女にとっての季節の移り変わりの意味であった。」(392) 輪作によって土壌の豊かさを保っていくこと、そして一人の独立した女性が自然及び共同体と共生していくことが、あるべき平和な田園の姿であるとDorindaは認識する。

Endurance. Fortitude. The spirit of the land was flowing into her, and her own spirit, strengthened and refreshed, was flowing out again toward life. This was the permanent self, she knew. . . . "Put your heart in the land," old Matthew had said to her, "The land is the only thing that will stay by you." Yes, the land would stay by her. Her eyes wandered from far horizon to horizon. Again she felt the quickening of that sympathy which was deeper than all other emotions of her heart, . . . -the living communion with the earth under her feet. While the soil endured, while the seasons bloomed and dropped, while the

ancient, beneficent ritual of sowing and reaping moved in the fields she knew that she could never despair of contentment. (449-450)

「踏みしめた大地との血のかよった交わり」が急速に高まるのを感じたDorindaは、「土地が耐え抜くかぎり、四季が移り変わるかぎり、そして種まきと収穫という古くからの慈悲深い儀式が続くかぎり、決して心が充たされないことはないであろうと確信した。」20歳の時、女性の幸福は男性に依存する結婚にあると思っていた彼女は、50歳の今、自分自身と大地を基盤に立つ逞しい女性へと生まれ変わった。母親が指摘した「誰にも邪魔されない自分自身のもの」とは、Old Farmの土地だったことを彼女は悟ったのであった。

土地の改良・再生によってDorindaは、自然の摂理の永遠のサイクルを知った。土を聖なるものとして認め、土と共に生き、その生態系の恵みに与ることを知った。Glasgowは土を知性の糧としたDorindaの人格の「発展」と土地の「改良」を平行的な構造で描いたが、Dorindaの土地との闘いは自己の女性としての人格との闘いでもあった。やがてDorindaは自己の意識の中に土地の生命を感じるにより、土地と自己が交わり、土地という自然を受け入れて生きていくことを自覚するようになった。Glasgowは、ヴァージニアの農村の貧しく厳しい自然の中で、その土地を基盤に自己のアイデンティティを確立していくひとりの女性像——自立した個人として自然及び共同体との共生へと到達していく「不屈の精神」を持つ南部女性像——を描いたのである。

※ 本稿は日本英文学会中部支部第50回大会（1998年10月24日、名古屋大学）での口頭発表表に加筆修正したものである。

## 注

<sup>1</sup>Ellen Glasgow, *A Certain Measure*, 4-5. 舞台となる年代順に、歴史小説群には *The Battle-Ground* (1902), *The Deliverance* (1902), *The Voice of the People* (1900), *The Romance of a Plain Man* (1909), *Virginia* (1913), *Life and Gabriella* (1913), 田園小説群には *The Miller of Old Church* (1911), *Barren Ground* (1925), *Vein of Iron* (1935), 都市小説群には *The Sheltered Life* (1932), *The Romantic Comedians* (1926), *They Stood to Folly* (1929), *In This Our Life* (1941) がある。

<sup>2</sup>Glasgow, *Barren Ground* (1925; New York: Charles Scribner's Sons, 1938), 3. この作品からの引用はすべてこの版に基づき、以後、引用箇所は括弧内に頁数を示す。尚、訳は板橋好枝・羽澄直子・藤野早苗訳『不毛の大地』（荒地出版社、1995）を参考に拙訳を補った。

引用文献

Glasgow, Ellen. *A Certain Measure*. 1938. New York: Harcourt, 1943.

—. *Barren Ground*. 1925. New York: Charles Scribner's Sons, 1938.

Matthews, Pamela R. *Ellen Glasgow and a Woman's Traditions*. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.

Rouse, Blair. *Ellen Glasgow*. New Haven: Twayne Publishers, 1962.

Thiebaut, Marcelle. *Ellen Glasgow*. New York: Frederick, 1982.